

六条院の秩序形成-割り振られた季節と春秋争い-

メタデータ	言語: jpn 出版者: 明治大学大学院 公開日: 2010-03-09 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 西野入, 篤男 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/7367

六条院の秩序形成

——割り振られた季節と春秋争い——

Order formation of “Rokujyounoin”

——The assigned season and “syunjuu-
arasoi”——

博士後期課程 日本文学専攻 二〇〇五年度入学

西野 入 篤 男

NISHINOIRI Atsuo

【論文要旨】

太政大臣として位を極めた光源氏の大邸宅である六条院は、四方に四季を配する独自の構造を有する。四季を表象する各町には、源氏と関係の深い女君たちが、女主として据えられる。配された女君と季節の組み合わせは、それぞれの女君が歩んできた過去と深い関わりがある。本論は女君と季節の組み合わせ・少女巻で語られる落成当初の六条院の風景から、光源氏がいかにして六条院の生活を始めようとしたのか、その意図を探るものである。各町の風景には登場人物たちが語る以上に多くの

メッセージが込められている。

初登場から「霞」に隠された「桜」のイメージを帯びた紫の上、六条御息所の「秋」のイメージを引き継ぎ、亡き母の鎮魂のために据えられた秋好中宮、「花橘」をはじめ「撫子」「薔薇」を想起させる人柄である花散里、「秋」から「冬」へと表象する季節が移り変わり、六条院入りするにあたり紫の上を脅かす存在から外れていく明石の君。各町に込められたメッセージを拾い出すことにより、光源氏の意図する六条院秩序が浮かび上がってくる。

また、春秋争いという伝統的美意識を基底に据えた表現は、社会的身分差を醜化し、六条院の秩序形成に大きく貢献する。

【キーワード】 町の季節、女君の過去、植物、春秋争い、正妻の座

1 はじめに

六条院は、少女巻でその造営が語られ、同巻後半に完成する光源氏の大邸宅である。一般に貴族の邸宅が、条里制の一区画である一町に造営されるのに対し、六条院は四町を占めて造られている。その六条院最大の特徴が、各町を四季によって構成していることであり、その四季を表現した各町には、源氏ゆかりの女性や女主人として移り住むこととなる。東南は春の町で紫の上が住み、西南は秋の町で秋好中宮、東北は夏の町で花散里、西北が冬の町で明石の君が住む。

四季を象徴する各町に女君を割り当てることについて、森野正弘氏は「それぞれ別個の空間に散在していた女君たちを一箇所に集約し、個々

の持っていた社会的な文脈を切断したうえで、あらためて四季の季節を表象するべきそれぞれの位置に配置してゆくという手続きが執られ、女君たちは同等な位置を与えられることになる⁽¹⁾と指摘する。「社会的な文脈を切断した」と言い切れるかは別として、物語が社会的な身分秩序とは異なる方法で女君の統制を語り始めたことは間違いない。ただしそれが、「同等な位置を与えた」ということにはならないであろう。なぜなら、平安時代の季節観は、『古今和歌集』の部立てにおける春秋の偏重や、額田王の春秋論の歌や歌合せの存在によって、春と秋に心を寄せていたことが明らかだからである⁽²⁾。秋を10の比率として考え、『古今和歌集』の部立ての構造を例に挙げれば、春は9.2で、春と秋とがほぼ対等の歌数を有しているのに対して、夏は2.3・冬は2と、それらの五分の一の量を占めるに過ぎない⁽³⁾。そして六条院が『古今和歌集』の季節観を基調としていることは過去の研究により明らかであり、論者もそこに注目し、季節体系に組み込むことによって新たに序列付けが行われたと考えている⁽⁴⁾。したがって、春・秋の町が与えられた紫の上と秋好中宮には、夏・冬の町を与えられた花散里と明石の君よりも格上の地位が与えられていると考えるのである。

本論では、少女巻に描かれる六条院落成当初の各町の風景と、町の季節と女君の組み合わせに注目し、各町に据えられた女君の位置づけを検証していく。町の季節と女君の組み合わせについては、既に女君が歩んできた過去との関連が馬場婦久子氏により指摘されているが、本論では各町に植えられた「植物」に一層の注意を払っていききたい。六条院落成以前、あるがままに存在した花や木は、六条院の庭に移し植えられるこ

とによって、あるべき花や木へと変貌していく。そのような視点から、六条院物語の始発を捉え直していきたいのである。

また、秋好中宮と紫の上の春秋争いの意味についても考察し、春秋争いを下地に据えた表現に関しても検証していく。紅葉真つ盛りの九月に六条院に移ってきた秋好中宮は、色とりどりの花や紅葉に秋の町の素晴らしさを自負した歌を添えて、春の町に住む紫の上に贈る。これに端を発し、秋好中宮と紫の上は春秋争いという伝統的美意識に基づいた雅な応酬を繰り広げるのであるが、そのやりとりを六条院の秩序形成という視点から、どのように考えることができるのか見ていくこととする。

2 紫の上と春の町

まず、紫の上と春を結びつける理由を考察することからはじめる。紫の上が春の町に据えられた理由として、薄雲巻で展開された源氏と秋好中宮の春秋論が挙げられる。「狭き垣根の内なりとも、そのをりの心見知るばかり、春の花の木をも植ゑわたり、秋の草をも掘り移して、いたづらなる野辺の虫をも住ませて、人に御覽せさせむと思ひたまふるを、いづ方にか御心寄せはべるべからむ」(薄雲巻四六二頁)と、春と秋のどちらに心惹かれるか問う源氏に対し、「げにいつとなき中に、あやしと聞きし夕こそ、はかなう消えたまひにし露のよすがにも思ひたまへられぬべけれ」(薄雲巻四六二頁)と、秋好中宮は母六条御息所の死んだ秋を選ぶ。そしてその夜に、源氏が「女御の、秋に心を寄せたまへりしもあはれに、君(紫の上)の春の曙に心しめたまへるもことわりにこそあれ。時々につけたる本草の花に寄せても、御心とまらばかりの遊びな

どしてしがな」(薄雲卷四六四、四六五頁)と紫の上に語ることから、紫の上が「春の曙」に心寄せる人であることが明示される。

この春秋論から春の町に紫の上が、秋の町に秋好中宮が配されたといえるが、紫の上が春と結び付けられていることに必然性があるのかどうかは、この場面だけでは説明しきれない。なぜなら、物語で紫の上が春に心惹かれる女性であることは、一度も語られたことがないからである。源氏によって一方的に、春を好む女性とされているのである。それではなぜ、源氏は紫の上を春に心寄せる人としたのだろうか。その答が、春の町に植えられた「桜」と紫の上の関係を考察することによって明らかになる。春の町の庭の様子を見ていく。

南の東は山高く、春の花の木、数を尽して植ゑ、池のさまおもしろくすぐれて、御前近き前栽、五葉、紅梅、桜、藤、山吹、岩躑躅などやうの春のもてあそびをわざとは植ゑて、秋の前栽をばむらむらはのかにまぜたり。
(少女卷七八、七九頁)

春の町には五葉、紅梅、桜、藤、山吹、岩躑躅が植えられている。『源氏物語』では、自然がたんに背景としてかたどられるのではなく、登場人物の情動や心理を表象するものとして、自然があるといわれるように、植えられた植物はたんなる景物としてそこにあるのではない。各町に植えられた植物には光源氏が抱く女君のイメージが込められていると同時に、六条院における女君の位置付けをも読み取ることができよう。春の町に植えられた植物の中で、最も紫の上と関係の深い植物は

「桜」である。野分巻で紫の上を垣間見た夕霧が、「春の曙の霞の間より、おもしろき樺桜の咲き乱れたるを見る心地す」(野分巻二六五頁)と「樺桜」に、さらに若菜下巻の女衆で源氏が紫の上を「花といはば桜にたとへても、なほ物よりすぐれたるけはひことにものしたまふ」(若菜下巻一九二、一九三頁)と「桜」に喩えているのは有名であるが、紫の上は初登場の若紫巻から、「桜」と共に語られていた女性であることを確認しておく。

紫の上は「三月のつごもりなれば、京の花、盛りはみな過ぎにけり。山の桜はまだ盛りにて、入りもておはするままだに、霞のたたずまひもをかしう見ゆれば」(若紫巻一九九、二〇〇頁)と、「桜」が咲き誇る北山で、源氏に垣間見られることにより初登場することとなる。源氏は垣間見た美少女(紫の上)に、恋い慕ってやまぬ藤壺の姿を重ね、この少女を引き取って育みたいと考え、僧都や尼宮にそのことを懇願するが、その願いは取り合ってもらえなかった。少女を引き取るまでの物語で、紫の上は繰り返し「桜」に喩えられている。

北山を下りる前、少女を思ふ源氏は尼宮へ歌を送る。

夕まぐれはのかに花の色を見てけさは霞の立ちぞわづらふ

(若紫巻二二二頁)

昨日の夕暮時ちらりと美しい花を見たので、今朝は霞の立つのとともに立とうとしても立ちかねていますという意味の歌で、紫の上は「花(桜)」に喩えられて表現されている。尼君から送られてきた返歌でも紫

の上は「まことにや花のあたりは立ちうきとかすむる空のけしきをも見む」(若紫卷二二三頁) というように、同じく「花(桜)」に喩えられている。

さらに、下山して後も紫の上を引き取りたい意志を伝える源氏と、それを断る尼宮の贈答の中でも、

(源氏) 面影は身をも離れず山桜心のかぎりとめて来しかど

(若紫卷二二八頁)

(尼宮) 嵐吹く尾上の桜散らぬ間を心とめけるほどのはかなさ

(若紫卷二二九頁)

というように「桜」に喩えられているのである。紫の上が物語に登場した当初から、「桜」に喩えられていた女性であることを確認した。

それでは、当時「桜」はどのような花と考えられていたのだろうか。紫の上を「桜」に喩えるということは、彼女が「桜」を想起させるような女性であったはずである。『古今和歌集』から「桜」の持つイメージを考えていく。

『古今和歌集』で「桜」は、東の間の美しさに、時の推移や、人や人の心の移ろいを託した表現が多く見受けられるが、紫の上と関係の深いと思われる「桜」は、春の到来を告げる「霞」と一緒に表現される「桜」であろう。「霞」は何かを隠すもの、視界を遮るものという発想で、せっかくの桜を隠して見せてくれないという不満を前提にして、見えざる春の気色をかえって理想的に想像しようとする歌われる。⁽⁸⁾いくつか例を挙げ

ると、

春霞に隠すらむ桜花散る間をだにも見るべきものを

(春上・七九・紀貫之)

花の色は霞にこめて見せずとも香をだにぬすめ春の山風

(春下・九一・良岑宗貞)

三輪山をしかも隠すか春霞人に知られぬ花や咲くらむ

(春下・九四・紀貫之)

春霞色のちぐさに見えつるはたなびく山の花のかげかも

(春下・一〇二・藤原興風)

などがあり、いずれも「霞」に隠された「桜」の美しさを表現している。

そして、このような「霞」に隠された「桜」のイメージは、北山での紫の上に一致する。なぜなら、北山の場面では「霞のたたずまひ」(若紫卷二〇〇頁)、「はるかに霞みわたる」(若紫卷二〇二頁)、「夕暮のいたう霞みたる」(若紫卷二〇五頁)、「明けゆく空はいといたう霞みて」(若紫卷二一九頁)と霞みわたる情景が繰り返し描写され、先ほど挙げた源氏の歌でも「夕まぐれほのかに花の色を見てけさは霞の立ちぞわづらふ」(若紫卷二二三頁)と「霞」が歌われているからである。

つまり、桜が咲き誇り、霞に覆われた北山で発見した美少女は、源氏にとって「霞」に隠された美しい「桜」に喩えるに相応しい人であったということである。

本論の考察対象としている少女巻よりも後の巻の話となるが、六条院

春の町が「霞」と共に多く語られていることを指摘しておく。

初音巻の正月十四日の男踏歌の一節に、「御方々、いづれもいづれも劣らぬ袖口ども、こぼれ出でたるこちたさ、物の色あひなども、曙の空に春の錦たち出でにける霞の中かと見たさる」(胡蝶巻一五九頁)とあり、野分巻で紫の上を垣間見た夕霧は、その感動を「気高くきよらに、さとにほふ心地して、春の曙の霞の間より、おもしろき樺桜の咲き乱れたるを見る心地す」(野分巻二六五頁)と表現している。同様の表現は、胡蝶巻の舟楽の場面や、秋好中宮の季御読経の場面にも見ることが出来る。前者は、「こなたかなた霞みあひたる梢ども、錦を引きわたせるに、御前の方ははるばると見やられて、色を増したる柳枝を垂れたる、花もえもいはぬ匂ひを散らしたり」(胡蝶巻一六六―一六七頁)と、霞の途切れの奥に、紫の上の居所が桜柳に彩られながら存在する趣であり、後者では、中宮のもとに紫の上の使者としてやってくる童女たちの一行が、「いとうららかに晴れて、霞の間より立ち出でたる」(胡蝶巻一七二頁)と、霞の中から現れてくる表現である。さらに、若菜上巻の六条院の蹴鞠の日、柏木が女三宮を垣間見ることとなる春の町の描写は、「ゆゑある庭の木立のいたく霞みこめたるに、色々紐ときわたる花の木ども、わづかなる萌木の蔭に、かくはかなきことなれど、よきあしきけぢめあるをいどみつ、我も劣らじと思ひ顔なる中に、衛門督のかりそめに立ちまじりたまへる足もとに並ぶ人なかりけり」(若菜上巻一三八頁)と語られる。

六条院春の町で「霞」が隠すものは、「桜」に喩えられた女君である。「霞」に覆われた春の町は、その中に美女を隠す「禁断の花園」のイメージ

ジを強く持たせるのである。⁽⁹⁾

桜咲く北山で、霞に隠された桜に喩えるに相応しかった紫の上のイメージ、彼女が春の町の主人に据えられた理由はそこにある。

さらに、北山での出会いを想起させる植物として「山吹」「藤」「五葉」も見逃すことはできない。⁽¹⁰⁾

きよげなる大人二人ばかり、さては童べぞ出で入り遊ぶ。中に、十ばかりやあらむと見えて、白き衣、山吹などの萎えたる着て走り来たる女子、あまた見えつる子どもに似るべうもあらず、いみじく生い先見えてうつくしげなる容貌なり

(若紫巻二〇六頁)

初めて源氏の目に飛び込んできた紫の上は「山吹」襲の色目の衣裳を着ていた。

前栽に植えられた「藤」は、藤壺との関係における紫の上の位置を見て取ることができる。北山で紫の上を見た源氏は、その姿に藤壺を投影し涙している。

限りなう心を尽くしきこゆる人にいとよう似たてまつれるがまもらるるなりけり、と思ふにも涙ぞ落つる

(若紫巻二〇七頁)

紫の上が藤壺ゆかりの女性として物語に位置づけられ、その特権的な位置で源氏の愛情を独占することは多くの言を俟たない。河添房江氏が藤壺の「藤」の象徴性に注目し、その「紫色の高貴な属性」が、藤壺の

存在の「メタファーとして作用」することを論じているように、春の町に植えられた「藤」も、紫の上が藤壺ゆかりの女性であることを表している。春の町に植えられた「藤」は、藤壺ゆかりの女性として紫の上が六条院に入っていることを表しているのである。

そして「五葉」である。

聖、御まもいに独鈷奉る。見たまひて、僧都、聖徳太子の百済より得たまへりける金剛子の数珠の玉の装束したる、やがてその国より入れたる箱の唐めいたるを、透きたる袋に入れて、五葉の枝につけて、紺瑠璃の壺どもに御薬ども入れて、藤桜などにつけて、所につけたる御贈物ども捧げたてまつりたまふ
(若紫卷二二頁)

源氏は聖、僧都との別れに際し、聖から独鈷を、僧都から裝飾された「金剛子の数珠」と薬壺を送られている。そしてそれらの贈り物は、「五葉の枝」や「藤」「桜」によって飾られていた。

このように見ていくと、春の町に植えられた多くの植物には、北山での紫の上発見という運命的な出会いを喚起する、構造的な意味を読み取ることができる。

3 秋の町と秋好中宮

続いて、秋の町と秋好中宮の関係を考察していく。まずは秋の町の様子である。

中宮の御町をば、もとの山に、紅葉の色濃かるべき植木どもを植ゑ、泉の水遠くすまし、遣水の音まさるべき巖たて加へ、滝落として、秋の野を遙かに作りたる、そのころにあひて、盛りに咲き乱れたり。嵯峨の大堰のわたりの野山むとくにけおされたる秋なり

(少女卷七九頁)

秋の町に具体的な草木の描写はないが、「もとの山に」とあるように、旧状を尊重し、秋の風情に重点が置かれている。秋好中宮と秋との関係は、先にも触れた薄雲巻での春秋論から、母六条御息所が死んだ秋と結び付けられ説明がなされているが、中宮のみならず源氏にとっても、六条御息所が秋を思わせる女性であったことも大きな要因ではなかろうか。賢木巻に描かれる印象的な二つの場面を振り返ってみる。

まず、源氏が伊勢下向の日が迫っている御息所のもとへ訪問を思いつた場面である。

たはやすく御心にまかせて参でたまふべき御住み処にはたあらねば、おぼつかなくて月日も隔たりぬるに、院の上、おどろおどろしき御なやみにはあらで例ならず時々なやませたまへば、いとど御心の暇なけれど、つらきものに思ひはてたまひなむいとはしく、人聞き情なくやと思しおこして、野宮に参でたまふ。九月七日ばかりなれば、むげに今日明日と思すに、女方も心あわたたしけれど、立ちながらと、たびたび御消息ありければ、いでやとは思しわづらひながら、いとあまり埋れいたきを、物越しばかりの対面はと、人知

れず待ちきこえたまひけり

(賢木巻八四〜八五頁)

源氏との仲に深く傷つく六条御息所は、娘(秋好中宮)が斎宮として下向するのを口実に、自らも源氏を振り切って伊勢に下ろうかと思っていた。そしてその決意は、葬上をとり殺してしまった生霊事件以来さらに強いものとなっている。「九月七日ばかりになれば」とあるように季節は秋である。

次は、光源氏が野宮に六条御息所を訪ね、夜明けとともに帰る場面である。

やうやう明けゆく空のけしき、ことさらに作り出でたらむやうなり。

(源氏) あかつきの別れはいつも露けきをこは世に知らぬ秋の

空かな

出でがてに、御手をとらへてやすらひたまへる、いみじうなつかし。風いと冷やかに吹きて、松虫の鳴きからしたる声も、をり知り顔なるを、さして思ふことなきだに、聞き過ぐしがたげなるに、ましてわりなき御心まどひどもに、なかなかこともゆかぬにや。

(御息所) おほかたの秋の別れもかなしきに鳴く音な添へそ野

辺の松虫

悔しきこと多かれど、かひなければ、明けゆく空もはしたなうて出でたまふ、道のほどいと露けし。

女もえ心強からず、なごりあはれにてながめたまふ。ほの見たてまつりたまへる月影の御容貌、なほとまれる匂ひなど、若き人々は

身にしてみても、過ちもしつべくめできこゆ。(女房)「いかばかりの道にてか、かかる御ありさまを見棄てては、別れきこえん」と、あいなく涙ぐみあへり。

(賢木巻八九〜九〇頁)

傍線を付した箇所からわかるように、両場面とも秋の風景であり、「秋」に「飽き」を響かせるような描写により、光源氏との関係における六条御息所の絶望的な心情を表している。

源氏は秋のイメージを帯びる六条御息所と秋好中宮を重ね、中宮を秋の町の主人とした。さらに、六条院は六条御息所の故地に造営されていることも注意が必要である。その点に関して藤井貞和氏は、「六条御息所の遺し置いた遺言にしたがい、むすめ斎宮女御を中宮の地位に押しあげるほどにまで待遇したことは、御息所の霊魂にたいするなよりの鎮魂であつただろう。それは故六条御息所の遺地で待遇してこそ完べきに鎮魂を果たしているといえるのだ」と指摘する。⁽¹²⁾

また、玉上琢彌氏は秋の行事である盂蘭盆会と、六条御息所の関係を指摘している。⁽¹³⁾「盂蘭盆とは梵語で倒懸(さかさまにかかる)の苦を救うと意味で、そのいわれは盂蘭盆経に詳しい。目蓮は、亡き母が餓鬼道のなかに生じ倒懸の苦しみに会っている。そこで目蓮は悲号啼泣し、この苦を救うことを仏に乞うたところ、仏は七月十五日、僧、自恣のときに七世の父母、および厄難中の者のために、飯と五菓(李、杏、棗、桃、栗)等をお供え、甘美をつくして盆中にのせて十方衆僧をお供養すれば、解脱し三界の業苦を脱することを得るといった」という。

六条御息所の鎮魂をいかにして果たすかは物語で重要な問題である。

源氏が強力に秋好中宮をバックアップした背景には、政治的意図はもちろんのこと、六条御息所鎮魂を試みたことは間違いない。

秋好中宮が六条院秋の町に据えられた理由は、母六条御息所が「秋」を想起させる女性であったこと、そして、秋好中宮を秋の町に据え、強力に後見することにより、六条御息所鎮魂が意図されているのである。

4 夏の町と花散里

夏という季節と花散里は物語で一貫して結び付けられてきている。まずは、町の風景から見てみよう。

北の東は、涼しげなる泉ありて、夏の蔭によれり。前近き前栽、呉竹、下風涼しかるべく、木高き森のやうなる木ども木深くおもしろく、山里めきて、卯花の垣根ことさらにしわたして、昔おぼゆる花橘、撫子、薔薇、くたになどやうの花くさぐさを植ゑて、春秋の木草、その中にうちまぜたり。東面は、分けて馬場殿つくり、埒結びて、五月の御遊び所にて、水のほとりに菖蒲植ゑしげらせて、むかひに御覧して、世になき上馬どもをととのへ立てさせたまへり。

(少女巻七九頁)

「涼しげなる泉ありて、夏の蔭によれり」とあるように、夏の強い日差しから蔭を作り、涼しく快適に過ごすことが重視されて造られている。そして、夏の町に植えられている植物は、花散里の人柄を想起させるようなものが選ばれている。「花橘」、「撫子」、「薔薇」に注目しなが

ら、花散里が夏の町に据えられた理由を考察していく。

花散里は「五月雨の空めづらしく晴れたる雲間に渡りたまふ」(花散里巻一五四頁)、「五月雨つれづれなるころ、公私もの静かなるに、思しておこして渡りたまへり」(濡標巻二九七頁)、「卯月ばかりに、花散里を思ひ出できこえたまひて、忍びて、対の上に御暇聞こえて出でたまふ。日ごろ降りつるなごりの雨すこしそそきて、をかきほどに月さし出でたり」(蓬生巻三四四頁)というように、源氏にとって五月雨の頃に思ひ出される女性である。そのような花散里の持つイメージから植えられている植物が、「昔おぼゆる花橘」である。

「五月待つ花橘の香をかげば昔の人の袖の香ぞする」(古今集・夏・一三九・読み人しらず)という歌は、夏の到来とともに橘の花が香ぐわしく咲き始めると、普段忘れかけていた昔の人の袖の香がして、にわかに記憶が蘇ってくるという意である。この歌から、橘は過去を思い起こさせるものという連想性を持つ歌言葉として固定化する。つまり、普段は忘れかけているが、ふとした時に思い出される女性が花散里だったのである。

花散里の「橘」の設定について坂本昇氏は、春の町の紫の上の「桜と相並んで対面する植物」であり、「南殿の庭先、南階の左右に植えられたはず」とし、「紫の上と花散里は、南殿の桜と橘が階の左右に対称して位置する妻」としてとらえている⁽¹⁴⁾。「南殿の庭先、南階の左右に植えられた」かどうかは不明であるが、須磨流謫の折には、源氏と共に苦勞を重ねた女性であり、紫の上が明石の姫君の養母になると同じように、花散里が夕霧の養母となっている点を思い合わせると、妻として六

条院に迎えられたと考えて間違いない。そして、彼女に対する光源氏の信頼は「吳竹」となって夏の町に現れているといえよう。「竹」はたとえ中が空洞でも強くて柔らかで時間が経っても変色しないことから、道德的で貞節の強い人を表すのに引用される。⁽¹⁵⁾ 和歌的な季節観において、特に季節を限定することのない「竹」が夏の町に植えられていることは、花散里の人柄と結びつくからにはかならない。また、「吳竹」について藤本勝義氏は、夕顔巻に現れる竹との関連から、「吳竹」は、かような光源氏の青春のありようを、きわめて象徴する『ことば』であり、「夏の町の『吳竹』の設定は、漢詩文の季節感の単なる借用ではなく、玉鬘物語展開の重要な基軸をなす光源氏―玉鬘交渉を、円滑に導入すべく、その詩文を物語基底に据えたがためのものである」と、後の展開の伏線として「吳竹」が設定されていると指摘する。⁽¹⁶⁾

続いて、「撫子」について見てみる。源氏は夕霧の養母として花散里を選んでおり、花散里に「母」のイメージを持っていることが、植えられた「撫子」から想像される。なぜなら、平安時代に「なでしこ」は「撫でし児」という掛詞式の類音を介して、可憐な幼な子を連想させる花であった。帚木巻の雨夜の品定めで、頭中将が語る体験談の中に「山がつの垣は荒るともをりをりにあはれはかけよ撫子の露」（帚木巻八二頁）という女の歌がある。二人の間の幼い子（玉鬘）を「なでしこ」に喩えて、愛児に情をかけて欲しいと訴えているように、物語でも「愛児」の表現に使われている。夕霧や玉鬘が養子として花散里に預けられていること、また、多くの孫たちが彼女のもとで愛育されていることも、夏の町の主として花散里が「撫子（愛児）」を大切に育てるイメー

ジと関連していよう。

最後に「薔薇」について触れておく。「薔薇」は源氏にとって、精神的繋がりやの強さを想起させる花として捉えられていたはずである。⁽¹⁷⁾ その理由は、物語で「薔薇」が語られた場面が、当該箇所のほかにもう一例あり、そこが精神的紐帯の強さを物語る場面だからである。

光源氏二十五歳の夏、右大臣や弘徽殿太后は朱雀帝を擁しながら、時の権勢を欲しいままにして、源氏方を圧迫していた。源氏とその親友であった頭中将らが、その敵対勢力に圧迫される憂悶の情を慰めるべく、時流に乗らぬ博士たちをも招いて作文や韻塞を競っていた。ある日、その韻塞に負けた頭中将が、勝者の源氏を饗応する負態を催すこととなる。その場面で「階の底の薔薇けしきばかり咲きて、春秋の花盛りよりもしめやかにをかしきほどなるに、うちとけ遊びたまふ」（賢木巻一四一頁）と、春秋の花盛りよりもしつとりと落ち着いた感じの花として「薔薇」が語られる。春秋の華麗な花に対し、「薔薇」が落ち着いた感じの花とされていることは興味深いが、この場面で注目したいのは、源氏が右大臣方に圧倒される中で、権力的な繋がりではなく、精神的な連帯を見せるこの場面に「薔薇」の花が登場することである。古注はこの箇所「白氏文集」「薔薇正開。春酒初熟。因招劉十九・張大夫・崔二十四同飲」を指摘する。

薔薇正開春酒初熟因招劉十九・張大夫・崔二十四同飲

甕頭竹葉經春熟

甕頭の竹葉春を経て熟し

階底薔薇入夏開

似火淺深紅壓架

如錫氣味綠粘臺

試將詩句相招去

倘有風情或可來

明日早花應更好

心期同醉卯時杯

階底の薔薇夏に入りて開く

火に似て淺深、紅、架を壓し

錫の如き氣味、綠、臺に粘す

試みに詩句を將て相招去せば

倘し風情あらば或は來るべし

明日早花應に更に好かるべし

心に期す同じく卯時の杯に醉はんことを

(甕の中の酒は春を過ぎて正に出来上がり、階前の薔薇は夏に入つて盛んに開いている。紅の花が薄く濃く架を壓して咲き満ち、錫のように柔らかみを帯びて綠の葉が臺に着いている。詩を寄せて三友を招いたならば、風流の味を解する以上は必ず來遊するであらう。特に明朝の花は一層賞玩に値するであらうから。因つて余は君たちが必ず來て、我とともに朝酒を酌むだろうと独り自ら心に決めている。)⁽¹⁸⁾

薔薇の花を愛でながら友人と酒を酌み交わすという精神的紐帶を詠うこの詩は、『和漢朗詠集』にも載つており、當時よく知られていたであらう。光源氏が須磨流謫の折、琴の琴と『白氏文集』を持っていたことを考慮すれば、彼自身も「薔薇正開。春酒初熟。因招劉十九・張大夫・崔二十四同飲」の知識・イメージを以て、夏の町に「薔薇」を植えたとも考えられる。

花散里と直接関係する植物とはいえないが、夏の町に「薔薇」が植えられるのは、源氏が彼女に「薔薇」のイメージを抱いているためと

いうことはできるだろう。

花散里は、紫の上に次ぐ妻として、六条院に迎えられており、源氏が彼女に対して精神的紐帶の強さや、「母」のイメージを抱いていることが、夏の町に植えられた「薔薇」や「撫子」から読み取ることができた。続いて冬の町に入る明石の君について考察していく。

5 秋から冬へ

これまで考察から明らかのように、割り振られた季節と女君の過去は密接に結びついており、その季節が割り振られるだけの必然性を有していたといえる。しかし、冬の町に据えられる明石の君は冬に語られることがほとんどない。⁽¹⁹⁾ 明石の君が物語で結び付けられてきた季節は秋である。⁽²⁰⁾ しかし、彼女は秋の町に据えられなかった。そこに源氏の何らかの意図を読み取ることができよう。秋と結び付けられて語られてきた明石の君が、冬の季節を割り当てられた理由を探っていく。まず最初に、いくつか例をあげながら、明石の君が物語で秋の女性として語られていることを見ていきたい。彼女の登場から振り返る。

源氏が明石の入道から娘の身の上を明かされたのは、四月で季節は初夏である。源氏は「心細きひとり寝の慰めにも」(明石巻二四七頁)と思うのだが、明石の君は身の程をわきまえて、これに応じようとしていない。源氏はその氣品の高さにひかれるが、「人進み参らばさる方にても紛らはしてん」(明石巻二五〇～二五二)と自分からは訪れない。一方、明石の君も「なかなかやむことなき際の人よりもいたう思ひあがり」(明石巻二五一頁)で、二人の間では「心くらべ」(明石巻二五一頁)の

日々が過ぎていった。八月になり「明石には、例の、秋は浜風の異なるに、独り寝もまめやかにものわびしうて」（明石巻二五三頁）と、しびれを切らしたのは源氏の方であった。

十三日の月のはなやかにさし出でたるに、…（中略）…御直衣奉りひきつくりひて夜更かして出でたまふ。…（中略）…三昧堂近くて、鐘の声松風に響きあひてもの悲しう、巖に生ひたる松の根ざしも心ばへあるさまなり。前裁どもに虫の声を尽くしたり。ここかしこのありさまなど御覧ず。むすめ住ませたる方は心ことに磨きて、月入れたる真木の戸口けしきことにおし開けたり。…（中略）…人ざまいとあてにそびえて、心恥づかしきはひぞしたる。かうあながちなりける契りを思すにも、浅からずあはれなり

（明石巻二五五～二五八頁）

見てきたように、冬の町の女主人である明石の君と源氏がはじめて対面した時の季節は、八月であり秋であった。そして、その後の物語でも明石の君は秋と結び付けられて語られることが多い。

光源氏一行と出逢った住吉詣は、

その秋、住吉に詣でたまふ。…（中略）…をりしもかの明石の人、年ごとの例の事にて詣づるを、去年今年はさることありて怠りけるかしこまりとり重ねて思ひ立ちけり

（濡標巻三〇二頁）

と秋であり、上京して大堰の山荘に入る時も

いくかへりゆきかふ秋をすぐしつづき木にのりてわれかへるらん

（松風巻四〇七頁）

と明石の君が詠っているように、秋である。しかも大堰は秋の紅葉の名所でもある。

これらは、登場から春との結びつきを強めた紫の上に対し、その存在を脅かす女君として、当時の春秋争いを下地に据え、秋と強く結びつけ表現した物語の方法によるためであろう。思い起こしてみれば、明石の君の存在が初めて語られる若紫巻からして、明石の君との噂話と連なる形で若紫の垣間見が語られているし、明石巻の源氏が明石の君の所へ通い始める場面でも、源氏は「御心の鬼」（明石巻二五八頁）にいたく紫の上のことを気に懸け、明石の君との関係をすぐに文で告白してしまう。紫の上と明石の君は登場当初から「相對する一対」として発想されている。⁽²¹⁾

その後の物語で紫の上は、源氏の子供を儲けた明石の君に対し嫉妬する。阿部秋生氏が説かれるように、「召人」にも等しい存在⁽²²⁾に対し、紫の上は嫉妬するのである。紫の上と明石の君のように、その身分差が歴然としている場合、紫の上のこの嫉妬心はいささか異常である。

しかし、異常とも取れるこの紫の上の嫉妬が、明石の君の存在を紫の上を脅かす女性として物語の表面に浮かび上がらせるのである。紫の上の嫉妬は、明石の君を物語の中で身分差を越えて、秋の女として押し上

げている。

しかし、秋を象徴する女性として紫の上の存在を脅かした明石の君は、その一人娘を手放すことによって、冬のイメージを帯びた女性として変化する。

冬になりゆくままに、桂の住まひいとは心細さまさりて、上の空なる心地のみしつ明かし暮らすを…
(薄雲巻四二七頁)

明石の君が娘を手放す決心をし、それによって紫の上の嫉妬が収束していくあたりから、季節が冬になっていることに注目したい。娘を手放すことにより秋の女君から、冬の女君へ移り変わっていくのである。彼女が六条院に参入する時季も、

大堰の御方は、かう方々の御移ろひ定まりて、数ならぬ人はいつとなく紛らはさむと思して、神無月になん渡りたまひける

(少女巻八三頁)

と冬が選ばれているのである。

もう一つ注目したいのは、秋の町の「嵯峨の大堰のわたりの野山むとくにけおされたる秋なり」(少女巻七九頁)という叙述である。「嵯峨の大堰」は上京した明石の君が滞在した場所であり、秋の景色のすばらしさで知られる土地である。「嵯峨の大堰のわたりの野山むとくにけおされたる秋なり」という表現に、秋を象徴する女性が、明石の君から秋好

中宮に移ったことを読み取ることも可能であろう。⁽²³⁾

このような経緯で、明石の君は冬の町に据えられることとなる。彼女を迎え入れる冬の町の庭には、どのような光源氏の思惑が込められているであろう。冬の町の風景をから読み取れることを確認していく。

6 冬の町と明石の君

西の町は、北面築きわけて、御倉町なり。隔ての垣に松の木しげく、雪をもてあそばんたよりによせたり。冬のはじめの朝霜むすぶべき菊の籬、我は顔なる柞原、をさをさ名も知らぬ深山木どもの木深きなどを移し植ゑたり。
(少女巻七九〇八十頁)

冬の町でまず目にとまるのは御倉町である。これは明石の君の財力の大きさを表している。この財力が六条院の一町を賜った要因であろう。植えられた草木は、「松」と「菊」を除けば、「をさをさ名も知らぬ深山木」といったような名前も知られないような奥山の草木ばかりである。

まず始めに、植えられた植物が喚起するイメージを検証していく。

「菊」は重陽の明け方、菊の花にかぶせ露を湿らせた綿で顔の皺を拭いて老いを払うといった、不老不死のシンボルとしてのイメージがあるが、同時に「菊」は「謙譲の美德・君子の徳を表し、また、厳しい霜を冒し、馥郁たる薫香を秘めてひとり花咲くさまは、貞潔な心、強く真つすぐな気概の象徴⁽²⁴⁾」といったイメージも有している。例えば、『本朝文粹』巻一一―三三六には、「沙に映えて留まり、先づ貞心を嚴霜の底に

験す。場を擅にして立ち、遂に勁節を疾風の中に知る」とあり、「菊」はいかなる逆境にも揺るがぬ貞潔で公正無私な孤高の強い意志を表象している。夏の町にも「貞心」を表す「竹」が植えられていたが、「菊」は后がねである明石の姫君の実母であり、その姫君を失つてなお己の内に強い意志を秘め毅然と振舞う明石の君に相応しい花であるといえ、源氏はそういったイメージを彼女に抱いていると理解できる。ただし、後の展開において明石の君と「菊」が密接に結びつき語られる場面は特になく、彼女とより主題的な結び付きを見せる植物は「松」である。明石の君と「松」の関係は小山清文氏が論じており、氏によれば、明石一族と「松」の関係は、まず明石の君の居住描写によって明らかであるという。

明石の岡辺の家は「三昧堂近くて、鐘の声松風に響きあひてもの悲しう、巖に生ひたる松の根ざしも心ばへあるさまなり」（明石巻二五六頁）であり、大堰の邸は「これは川づらに、えもいはぬ松蔭に、何のいたはりもなく建てた寝殿のことそぎたるさまも、おのづから山里のあはれを見せたり」（松風巻四〇一頁）と語られ、そして六条院の冬の町には「西の町は、北面築きわけて、御倉町なり。隔ての垣に松の木しげく、雪をもてあそばんたよりによせたり」と造られている。後の物語で明石の姫君は「松」と関わりの深い「藤」に喩えられている。

さらに氏は、明石一族と松が、明石一族の住吉信仰と結びついていると想定し、「悠久性の象徴であり且つ住吉神をも連想される松が明石の邸をしっかりと保護し支え、又、一族の悲願の具現化（明石中宮＝松）としても立ち現れているということになろうか」と指摘する。ただし、

氏も指摘しているが「松」は掛詞式の類音を介して「待つ」をもたぐりよせるのである。少女巻に語られる冬の町において、悠久性の象徴である「松」は深層に沈められ、「松」待つ」のイメージが物語の全面に押し出されているよう。光源氏が冬の町の植物に込めたメッセージは「松」待つ」が象徴する、堪え忍び待ち続ける人生に他ならない。初音巻で明石の君は、「松」待つ」を見事に体现している。

紫の上と新年の挨拶を終えた光源氏は、同じく春の町に住む明石の姫君のもとを訪れる。そこには、明石の君が今日のために特別に用意したらしい贅沢な鬘籠や破子などが贈られてきていた。それらと共に、明石の君から姫君への手紙も送られてきている。

北の殿よりわざとがましくし集めたる鬘籠ども、破子など奉れたまへり。えならぬ五葉の枝にうつる鶯も思ふ心あらんかし。

（明石の君）年月をまつにひかれて経る人にけふ鶯の初音きかせよ
音せぬ里の
（初音一四五―一四六頁）

源氏は、明石の君がこのように娘と会えない苦しみを手紙に寄せてよこしたのを哀れに感じ、また罪なことをしたと思い、自ら硯をとり、姫君に返事を書かせる。

（姫君）ひきわかれ年経れども鶯の巢たちし松の根をわすれめや

（初音一四六頁）

明石の君の歌では、「松」「待つ」「古る」「経る」「初音」「初子」が掛詞、「松」「ひかれ」が縁語。「松」が姫君を、「経る人」が実母を表し、そして「初音」は初便りのことである。年月を小松（姫君）にひかれて過ごしてきた私に、今日の鶯の初音（初便り）を聞かせてくれ、という意である。明るく楽しげな春が巡ってきても、娘に再会できない母親の悲哀の情がにじみ出ている。

薄雲巻の十二月、明石の君は姫君と別れてから四年以上会っていない。同じ六条院に住みながら、会うことが許されない母としての苦しい思いの発露であろう。これに接した源氏は、「今までおぼつかなき年月の隔たりけるも、罪得がましく心苦し」（初音巻一四六頁）と感じる。その源氏の勧めで詠んだ姫君の歌では、「鶯」が自分を、「松」が実母をさし、別れて以来年月は経ったが、鶯（私）が巢立った松の根（生みの母親）を忘れることなどあるはずもない、という意である。新春の六条院の中に、実の娘とも会えない明石の君の忍従が封じ込められている。

ここにおいて明石の君が「松」待つ女性として物語に位置付けられる。六条院冬の町に植えられた「松」は、「名も知らぬ深山木」と相俟って、明石の君に身の上をわきまえ、待ち続ける忍従の生き方を強要する光源氏のメッセージにはかならない。初音巻におけるやりとりは、彼女が「待つ」女性として源氏の意思に則った女性を演じていることを意味してしよう。

明石の君を冬の町に据える措置には、紫の上に対する源氏の配慮もうかがえる。源氏は明石の君を冬に据えることにより、彼女が紫の上の妻の座を脅かす存在でないことを示し、明石の君には、その庭に名前もわ

からないような奥山の木々や「松」を植えることにより、おのれの身分をわきまえ、ひたすら「待つ」生活を送ることを強要したのである。秋を表象する女君としての名残が、秋の花である「菊」と「柞原」に表れており、特に「柞原」には『岷江入楚』が「母にたよりありおもしろくかけり明石上は中宮の御母なる心歎」と注するように、「母」の響きを読み取ることも可能である。⁽²⁵⁾

7 理想のヒロイン

さて、ここからは春の町に据えられた紫の上を物語が理想のヒロインとして造形していく過程を検証していく。その下地となるのが平安朝の人々が有していた季節観と、春秋争いである。

まず、平安朝の季節観であるが、当時、四季の趣の中でも春秋二つの季節が、特に重要な意味を担い、人々の心を捉えていたことは、『古今和歌集』の部立てにおける春秋の偏重や、額田王の春秋論の歌や歌合わせの存在によって明らかであり、そのような季節観の下に構想された六条院も、春の町と秋の町は特に重要な位置を担っていることは本論の冒頭で述べた通りである。春・秋の町に据えられた紫の上と秋好中宮は、夏・冬の町に据えられた花散里と明石の君よりも格上の地位を与えられている。そしてそれは、紫の上が正妻として六条院に入ったということである。六条院の町の割り振られた場面を見てみる。

八月にぞ、六条院造りはてて渡りたまふ。未申の町は、中宮の御旧宮なれば、やがておはしますべし。辰巳は、殿のおはすべき町な

り。丑寅は、東の院に住みたまふ対の御方、戌亥の町は、明石の御方と思しおきてさせたまへり。
(少女巻七十八頁)

傍線を付した「辰巳」は春の町である。ここに紫の上が入ることは明記されていない。しかし、「殿のおはすべき町」とされる春の町に紫の上が入るということは、「妻の座」という視点からとらえれば、「花散里や明石の君とは別格⁽²⁷⁾」の待遇がなされているといえ、紫の上が源氏の正妻として六条院入りしていることは明らかである。

しかし、これだけではまだ、紫の上の位置づけは曖昧である。そこで紫の上を物語において並ぶ人なき女性として位置づける表現として注目したいのが、春秋争いを下地に据えた表現である。春秋論や春秋争いというのは、勝ち負けを定めようというのではなく、春秋それぞれ比較できない良さを認めた上で、さらに争うことで一層その季節の興趣を添えようというものである⁽²⁸⁾。ここで重要なことは、勝敗が決まらないことであり、そのような考えを根底に据えて、物語は対立する人物に春と秋の属性を付加させ、現実的な身分差を無効にする方法を用いる。その一例として挙げられるのが、明石の君と秋の属性である。すでに考察したように、初登場から春の属性を帯びている紫の上の地位を脅かす女性として、源氏の子を生んだ明石の君には秋の属性が付加されていた。これは、春秋争いを下地に据えた表現であり、そのことによって身分差がある二人を対等の位置に据えることを可能にした。

六条院入りするに当たって、明石の君は秋の女性から転落した。紫の上を脅かす女性ではなくなったのである。六条院で、源氏の妻として紫

の上に並ぶ女性はいない。

そして、紫の上の安定した妻の座が、新しく秋の女性となった秋好中宮との春秋争いを通じて、具体的に位置づけられることとなる。二人の間に展開された春秋争いを見ていく。

紅葉も始まった秋、秋好中宮は六条院入りする。秋を堪能できるよう作られている中宮の庭は、殊更にすばらしい。夕暮れ時、秋好中宮は箱の蓋に色とりどりの花や紅葉を添えて紫の上に贈る。そこに添えられた手紙には、

心から春まつ苑はわがやどの紅葉を風のつてにだに見よ

(少女八十二頁)

とあり、秋の町の情趣を自負した歌が添えられていた。この歌は紫の上の東南の町を「心から春まつ苑」と明確に規定しており、秋好中宮の挑戦の姿勢が打ち出されている。春を象徴する重要な町が与えられ、源氏の心をとらえてやまない紫の上が、いかなる女性なのかを見極めようとする中宮の探りであろう。季節は九月で、紅葉の真っ盛りである。源氏が「このころ紅葉を言いくたさむは、竜田姫の思はんこともあるを、さし退きて、花の蔭に立ち隠れてこそ強き言は出で来め」(少女巻八二、八三頁)と言うように、和歌的な季節意識からすれば、秋好中宮の方が絶対的優位に立っているのである⁽²⁹⁾。

この歌に対して紫の上は、贈られてきた蓋に苔を敷いて巖などの風情にあしらって返事をする。

御返りは、この御箱の蓋に苔敷き、巖などの心ばへして、五葉の枝に、

風に散る紅葉はかろし春のいろを岩ねの松にかけてこそ見め

(少女巻八二頁)

紫の上の返事は、うつろいの象徴である「紅葉」に対して、常緑の

「松」は不変の象徴であり、「かろし」という表現によって、秋好中宮の「紅葉」による挑戦を鮮やかに受けとめている。⁽³⁰⁾季節的に不利な紫の上が、春を擁護しとおしたといえよう。そして、胡蝶巻の秋好中宮による季御読経の場面で「春の花盛りに、この御答へは聞こえたまへ」(少女巻八二頁)という助言が実行に移される。

晩春に六条院で催された、秋好中宮の季御読経の日に紫の上は、蝶の衣裳と鳥の衣裳を着た童に、桜と山吹の花を持たせ、

花ぞのこてふをさへや下草に秋まつむしははうとく見るらむ

(胡蝶巻一七二頁)

という歌を添えて秋好中宮に贈る。それを中宮は「かの紅葉の御返りなり」(胡蝶巻一七二頁)と微笑んでそれを見る。中宮は、昨日は声を上げて泣いてしまひそうでしたよといい、

こてふにもさそはれなまし心ありて八重山吹をへだてざりせば

(胡蝶巻一七三頁)

と返事をした。前日に春の町では、晩春の春の町を楽しむべく舟乗が催されている。源氏は中宮に春の町のすばらしさを見せようと考えるが、中宮という高貴な身分では自由に歩出くことはできない。代わりに中宮付きの女房たちを春の町に招待し見物させた。女房から中宮へ春の町のすばらしさを伝えさせようという魂胆である。神仙郷を思わせる春の町のすばらしさは、見物に來た女房たちに時が過ぎるのを忘させるほどであった。その催しに参加できなかった中宮は「物隔ててねたう聞こしめしけり」(胡蝶巻一六九頁)と嫉ましく思うばかりであった。

この春秋争いは紫の上の勝利といわれるが、ここでより重要なことは、公私で六条院を支える秋好中宮と紫の上の調和の取れた関係である。繰り返すが、春秋論や春秋争いは勝ち負けを定めようというよりは、春秋それぞれに比較できない良さを認めた上で、さらに争うことで一層その季節の興趣を添えようというものである。針本正行氏がこの一連の春秋争いについて「現天皇の后として光源氏の社会的栄華の支柱である中宮と、彼の精神的支柱である紫の上とを相対的に秩序づける過程であった」⁽³¹⁾と指摘するように、社会的地位を持つ秋好中宮に認められることによって、紫の上はその存在を位置づけることができた。それはつまり、六条院の正妻の座を、中宮の位にまで押し上げた表現ともいえる。また、ここで注目したいのは、秋好中宮と紫の上が対等に語られることが自然であることである。

春と秋のどちらが優れた季節であるか、その優劣をつけることはできないが、春の町に据えられた紫の上と、秋の町に据えられた秋好中宮の現実の身分差は明らかである。太政大臣といえども、臣下の妻でしか

い紫の上が、中宮である秋好と対等に渡り合えるはずがない。しかし、見てきたように物語は春・秋の二つの季節を前面に押し出す叙述によって、現実的な身分差を醜化し、対等な関係に位置づけているのである。当時の人々の心をとらえ、優劣をつけることができない春・秋の季節観を下地に据えた表現が、このことを可能にしたといえる。

以上考察してきた過程を経て、物語は六条院の女主人として紫の上を位置づけた。まず、かつて秋を想起させる女性である明石の君を、冬を象徴する女性とすることによって六条院の妻の座を確定させる。その確定させた妻の座を新たな秋の女君である秋好中宮と春秋争いを行わせ、対等に渡り合わせるにより、その妻の座を朝廷の中宮の位にまで押し上げ位置づけたのである。

8 まとめ

六条院の町の分配方法や、紫の上と秋好中宮の春秋争いから、六条院の序列を考察してきた。春秋の偏重という平安時代の季節観の下に構想された六条院は、春・秋に割り振られた紫の上と秋好中宮を公私の要としている。夏・冬の序列は町の風景を見れば明らかで、明石の君には自身の身分をわきまえ生活することが強要されている。源氏の妻としての序列は紫の上を頂点に、花散里、明石の君ということになる。この序列は春の町の「秋の前栽をばむらむらほのかにまぜたり」や、夏の町の「春秋の本草、その中にうちまぜたり」から読み取ることも可能であろう。春の町に「まぜ」られた「秋」の植物は、光源氏から紫の上へ、中宮という最高の身分を有する秋好中宮への調和を求められているのである。

り、夏の町に「まぜ」られた「春秋の本草」は、紫の上と秋好中宮への調和が花散里に求められているのである。冬の町に「まぜる」という表現を見出すことはできない。明石の君には「調和」よりも「卑下」が求められているのである。

そして、春の町を与えられることにより六条院の女主人として据えられた紫の上は、秋好中宮との春秋争いを通じて、その地位は朝廷の中宮の位にまで押し上げられ物語に位置づけられる。こうして紫の上は並ぶ者無き理想的なヒロインとして物語に位置づけられるのである。六条院を舞台とした物語の始まりにおいて、その空間は光源氏によって造られた、紫の上のための空間であったといえよう。

しかし、季節体系に割り振ることによって六条院の女主人としての位置づけられた紫の上の内実は、源氏の最も愛する女性であるが、実は正妻ではなく、子供もいないという不安定な位置である。季節による序列は観念的なものでしかない。その意味で、季節による統制は、身分秩序を隠蔽した統制といえる。その後の物語では、こうして隠蔽した身分秩序が顕になることによって、六条院の歯車は乱れていくこととなるのである。

注

(1) 森野正弘「六条院のシステム分化―明石の君の位相領域―」『源氏物語の鑑賞と基礎知識No.14 若菜上(後半)』至文堂、2000年12月

(2) 野村精一「光源氏とその『自然』―六条院構想をめぐって―」『源氏物語の研究』東京大学出版会、1974年。野村精一「六条院の季節の時空の持つ意味は何か」『国文学』25―6、1980年5月。小町谷照彦「六条

院の季節的時空―春秋の争いに即して』『源氏物語の歌ことば表現』東京
大学出版会、1984年8月25日など。

- (3) 東原伸明「六条院世界における明石君」「初音」巻の女君訪問を端緒と
して』『国学院大学大学院文学研究科論集』11、1984年1月

- (4) 野村精一「光源氏とその『自然』」「源氏物語の研究」東京大学出版会、
1974年。野村精一「六条院の季節的時空の持つ意味は何か」『国文学』
25-6、1980年5月。小町谷照彦「六条院の季節的時空―春秋の争い
に即して」『源氏物語の歌ことば表現』東京大学出版会、1984年8月
25日など。

- (5) 馬場婦久子「源氏物語『六条院』の変容」『中古文学』23、1979年
4月

- (6) 秋山虔「源氏物語の自然と人間」『王朝女流文学の世界』東京大学出版
会

- (7) 鈴木日出男『源氏物語歳時記』筑摩書店、1995年11月

- (8) 注7に同じ。

- (9) 注7に同じ。

- (10) 「回想の紫上は紅梅の人として造形される」(三田村雅子「梅花の美―回
想の香」『源氏物語感覚の論理』有精堂、1996年)と指摘されるよ
うに、「梅」も「桜」同様に紫の上と関係の深い植物であるが、六条院完
成以前の物語において、紫の上と「梅」の効果的な繋がりを見出すことは
できない。末摘花巻に初出する「梅」の木は、末摘花の赤い花を連想させ
る植物として登場し、同巻に語られる紫の上の利発で可憐な様子は印象的
ではあるが、そこに主題的な繋がりはない。紫の上と「梅」の関係は、六
条院物語が始動した後に新たに創り出されていくと考えてよいだろう。

- (11) 河添房江氏『源氏物語の喩と王権』(有精堂、1992年11月5日)の
序章で、「藤」の象徴性に注目すれば、その紫色の高貴な属性が、彼女の
隠喩、存在のメタファーとしても作用している。この紫色の花のイメージ
は、桐壺更衣の「桐」にも溯りうるし、さらに紫の上の「紫」にもつらな
り、紫のゆかりのイメージの原基ともなった」とする。

- (12) 藤井貞和「源氏物語主題論」『源氏物語の始原と現在』三一書房、19
72年4月

- (13) 玉上琢彌『源氏物語評釈』角川書店

- (14) 坂本昇「紫上と花散里」『中古文学』33、1984年5月

- (15) 「道真は貞誠忠直の心や『報国』の志をしはば歌っているが、松竹は
貞節の象徴としてその詩に数多く読み込まれている」(藤原克己『菅原道
真と平安朝漢文学』東京大学出版会、2001年5月15日)

- (16) 藤本勝義「六条院四季の町の植物設定をめぐって―玉鬘物語の構想に関
する一私見」『文学・語学』61、1971年9月

- (17) 渡邊道子氏は漢詩の「薔薇」の表現を考察し、薔薇の咲く場所が別天地
的に描かれることが多いことと、その薔薇の生息するところで酒を酌み交
わすことによつて、人々の精神的紐帯を図るという特徴を抽出し、その方
法が『源氏物語』にもそのまま踏襲されていると指摘する。(夏の町・花
散里とその植物)『実践国文』41、1992年3月

- (18) 原文は那波本に拠る。書き下し、訳は国訳漢文大成を参考とし、わかり
づらい箇所は改めた

- (19) 注5馬場論文に同じ。

- (20) 注3東原論文に同じ。

- (21) 池田和臣「明石の君の深層―想像力と夢」『国文学』38-11、1993
年10月

- (22) 阿部秋生「明石の御方」『源氏物語研究序説』下、東京大学出版会、1
959年

- (23) 注3東原論文に同じ。

- (24) 渡辺秀夫「菊」『詩歌の森 日本語のイメージ』大修館書店、1995
年5月1日

- (25) 『岷江入楚』は中野幸一「源氏物語古註釈叢刊」第七巻(武威野書院、
昭和61年5月20日)を使用。

- (26) 野村精一「光源氏とその『自然』」「源氏物語の研究」、1974年。野
村精一「六条院の季節的時空の持つ意味は何か」『国文学』1980年5
月。小町谷照彦「六条院の季節的時空―春秋の争いに即して」『源氏物語
の歌ことば表現』東京大学出版会、1984年8月25日など。

- (27) 林田孝和「紫の上の座」『国学院雑誌』1983年5月

- (28) 増田繁夫「春秋の争い―玉鬘・初音・胡蝶」『国文学』32-13

(29) 小町谷照彦「六条院の季節的時空―春秋の争いに即して」『源氏物語の歌ことば表現』東京大学出版会、1984年8月25日

(30) 注29小町谷論文に同じ。

(31) 針本正行「春秋争い」『講座源氏物語の世界』第五集、有斐閣、1981年8月30日